様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３３９２５
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２３８５

研究課題名（和文）イデオフォンにおける段階性と文法的統合性に関する研究

研究課題名（英文）Gradability in Idephones and Grammatical Integration

研究代表者
川原　功司（Kawahara, Koji）

名古屋外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：７０５８２５４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，イデオフォンなど活き活きとしたイメージを喚起し，特定の範疇に分けることのできない語彙における意味と文法的統合性に関して研究してきた．これらの語彙は音声的強調が反映されやすく，ジェスチャーが伴うことが多いなど，強い感覚が表現される傾向があるが，これらを慣習的推意といった観点から分析したりすることでその特殊性を明示的に記述することを目指した．また，これらの語彙はその使用法が限られており，併合のしやすさにおいて動詞や名詞といった主要な範疇の語彙とは異なる．この特殊性にも焦点を当てることで，語彙を意味的につなげることと統辞的につなげることの意義について形式言語学の観点から分析を行った．

研究成果の学術的意義や社会的意義
言語研究の意義に，ヒトという種に固有の能力の特殊性と一般性を明らかにすることと，その進化的起源について妥当なシナリオを提供するという役割がある．イデオフォンなどの語彙には類像性や音象徴といった特殊性があり，同様の性質は他の種における音声記号やジェスチャーといった記号操作能力においても観察されることがあり，進化的連続性について考える重要なきっかけとなりうる．また，回帰的併合が自由に行われないということは語彙としての定着度が弱いということでもあり，これは原型言語の段階においてはイデオフォンなどの感覚・象徴的な語彙が特に多様に使用された反映であるとも考えられ，語彙の化石化とも考えることができる．

研究成果の概要（英文）：Language distinguishes humans, showing complex abilities to convey both abstract and concrete ideas. Ideophones are sensory-imagery words that mimic the sounds or sensations they describe, often found across various languages. Their study can reveal much about the evolutionary development of language, as these elements share characteristics with the vocal symbols and gestures used by other species.
Similarities in the communication system of humans and other species suggest an evolutionary link. The study of these similarities helps in understanding the deep evolutionary roots of language and the scenarios that might have led to its emergence. The limited use of ideophones in languages indicates that they were more diversely used in proto-languages, reflecting an early stage of language development where expressive and sensory language was more prevalent. This pattern can be seen as a form of "lexical fossilisation".

研究分野：言語学

キーワード：イデオフォン　段階性　回帰的併合　間投詞　進化的連続性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

オノマトペは英語では“ ideophones ”，“ mimetics ”とも呼ばれ，擬音語・擬声語・擬態語を代表とする音象徴の機能を持つ語彙素である。日本語は豊かなオノマトペ体系を持っていることが知られており，音韻論的には和語，漢語，洋語と並んで一つの独立した語彙層を形成するという考え方もある。また，20 種類以上の辞書も編纂されている。しかし，ソシュールによる言語記号の恣意性の原則と，インド・ヨーロッパ語族においてまれな現象のためか，現代言語学においては核となる現象として捉えられる機会がほとんどなかった。しかし，言語類型論の発達により，オノマトペは，アジア，アフリカ，北米先住民の言語でかなり広範囲に観察されるということが分かってきた。また，近年の日本では，特に機能的と言われる理論言語学（認知意味論，機能文法など）の観点からオノマトペを分析する試みも増えてきた。さらに欧米においても，ニジェール = コンゴ語族の言語であるシウ語のオノマトペを包括的に研究した Dingemanse (2011)が出て以来，理論言語学における意義について考え始める研究者が出現するようになってきた。しかしながら，言語への形式的アプローチ，特に統語論や形式意味論・形式語用論といった観点からオノマトペを研究している研究者は現在のところ，ほとんどいなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は，スケールを用いて「グラグラ，クタクタ」といったイデオフォン（擬音語・擬声語・擬態語）における段階性 (gradability) を分析・記述することを通して，その核となる意味を明らかにすることである。特に，「huge，fantastic」といった極限 (extreme) 形容詞に観察される意味の強さと比較して分析することで，イデオフォンが持つ感覚的イメージの一部を明示的にする。また，段階性と関連する比較構文や程度構文などの文法的統合性の問題について考察し，意味の強さが最大限の基準として内在化された場合，意味的余剰性の削減のため文法的統合性が弱くなり，比較構文や程度構文といった複雑な構文が作れなくなると主張する。本研究を通して，これまでほとんど議論されることがなかったイデオフォンの段階性と漠然と捉えられていた意味の強さが明示的になり，通言語的な分析が可能になる。また，文法的統合性の議論を通して，言語構造が単純化していくプロセスの一つが明らかになる。イデオフォン (ideophones) は，expressives, mimetics, onomatopoeia とも呼ばれ，擬音語・擬声語・擬態語を代表とする音象徴の機能を持つ語彙素である。日本語は豊かなイデオフォン体系を持っていることが知られており，音韻論的には和語，漢語，洋語と並んで一つの独立した語彙層を形成するという考え方もある。また，20 種類以上の辞書も編纂されている。イデオフォンを研究するに当たって，日本語の母国語話者としての利点は計り知れない。

言語類型論の発達により，イデオフォンは，アジア，アフリカ，北米先住民の言語でかなり広範囲に観察されるということが分かってきた。しかし，ソシュールによる言語記号の恣意性の原則と，インド・ヨーロッパ語族においてまれな現象であり，またイデオフォンが幼稚で言語未満の段階の単語であると思われる傾向もあり，欧米の理論言語学においては核となる現象として捉えられる機会がほとんどなかった。しかし，ニジェール = コンゴ語族の言語であるシウ語のイデオフォンを包括的に研究した Dingemanse (2011) (The meaning and use of ideophones in Siwu, PhD thesis, Max Plank Institute for Psycholinguistics, Nijmegen and Radbound University) が出て以来，理論言語学における意義について考え始める研究者が出現するようになってきた。

３．研究の方法

イデオフォンは，母国語話者であれば容易に判断が付くが，通言語的に適用できるような定義が存在せず，「特殊な音形を持つ，感覚的イメージを描写する単語」という抽象的な表現で捉えられているのみである。通言語的なイデオフォンの研究を進めていくためには，明示的な仮説に基づく議論が欠かせない。本研究の第一の目的は，スケールという広く確立された方法を用いることによって，イデオフォンの段階性について明示的に記述することである。イデオフォンの段階性を中心に研究している文献は現在のところほぼなく，本研究はイデオフォンの通言語的な意味研究のパイオニアとなれる可能性が十分にある。また，イデオフォンの特徴の一つとして，使用者の強い気持ち・気分が込められることが多いというのがあるが，極限形容詞との類似性と比較して研究を進めることによって，通言語学的な分析が可能になる。さらに，文法的統合性の可能性について探ることによって，意味と統辞構造の複雑性の関連についても明らかにすることができる。

４．研究成果

形式的なアプローチを用いた言語学の意味的，統辞的な観点からイデオフォンを研究していくと，当初に想定したよりはイデオフォンは特殊な語彙ではないということが分かってきた。そして，イデオフォンの特殊性は範疇として特定の活用などがないこと，併合の対象とする場合には特殊なイントネーションや引用符などが必要とされること，動詞や名詞などの主要な語彙とは異なり自由に回帰的併合の対象とはならないこと，音声的強調やジェスチャーを伴うことが多いことといった特性が分かってきた。これらの特性は比較生物学的な観点から考えれば，他の種とも類似の能力が観察されることがあり，その進化的連続性について新たな視点から問いを立てることが可能になるということが分かった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 Koji Kawahara	４．巻 29
２．論文標題 The Semantics of Iconic Gesture in Ideophones	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	６．最初と最後の頁 209-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Koji Kawahara	４．巻 56
２．論文標題 Introducing Iconicity: The Semantics of Ideophones and the Quotative Particle	５．発行年 2022年
３．雑誌名 CLS	６．最初と最後の頁 219-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川原　功司	４．巻 98
２．論文標題 安井永子・杉浦秀行・高梨克也編『指さしと相互行為』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 英文学研究	６．最初と最後の頁 190～194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20759/elsjp.98.0_190	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川原功司	４．巻 1
２．論文標題 5文型からみた「意味順」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 明日の授業に活かす「意味順」英語指導	６．最初と最後の頁 63-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川原功司	４．巻 1
２．論文標題 統辞論からみた「意味順」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 明日の授業に活かす「意味順」英語指導	６．最初と最後の頁 39-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Koji Kawahara	４．巻 26
２．論文標題 Subjective Ideophones and Their Core Meanings	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	６．最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuko Yoshimura, Koji Kawahara and Mitsuru Kikuchi	４．巻 26
２．論文標題 Turn-taking in Children with Autism Spectrum Disorder: Discussion Regarding Ne and Backchannel Interjections	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	６．最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Koji Kawahara	４．巻 27
２．論文標題 Syntax of Japanese Predicative Ideophones	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	６．最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松島 茜，岡 夏樹，深田 智，吉村 優子，川原 功司	4．巻 119
2．論文標題 対話行為を表す機能語の獲得 －自動的な処理と意識的な処理を統合したモデルの構築－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 信学技報	6．最初と最後の頁 93-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Koji Kawahara	4．巻 44
2．論文標題 Gradable Ideophones, Scales and Maximality in Grammar	5．発行年 2019年
3．雑誌名 BLS	6．最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　5件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 川原功司・石塚祐香・吉村優子
2．発表標題 自閉スペクトラム症における言語の周縁事項：間投詞とジェスチャーを中心に
3．学会等名 自閉スペクトラム症（ASD）における言語と共感（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 田地野彰・川原功司
2．発表標題 教育文法と記述文法の緊張関係の緩和に向けて－「意味順」を活用した句構造・設置詞の分析－
3．学会等名 The JACET 60th Commemorative International Convention
4．発表年 2021年

１．発表者名 岡夏樹・松島茜・萬處修平・深田智・吉村優子・川原功司
２．発表標題 Subjective BERT: self-attention による「おいしいね」「おいしそうだよ」 の意味理解
３．学会等名 日本認知科学会第38回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Koji Kawahara
２．発表標題 The Semantics of Iconic Gesture in Ideophones
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics 29（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川原功司
２．発表標題 対話行為における分業
３．学会等名 日本英文学会中部支部第73回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Koji Kawahara
２．発表標題 Introducing Iconicity: The Semantics of Ideophones and the Quotative Particle
３．学会等名 Chicago Linguistic Society 56（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Koji Kawahara
２．発表標題 The Evolution of Language and Lexicon: A Comparative Perspective
３．学会等名 ELSJ 13th International Spring Forum（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Koji Kawahara
２．発表標題 Forming the Mimetic Predicate
３．学会等名 Workshop on Mimetics IV: Parameters and Mimetics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川原功司
２．発表標題 音声的強調があるイデオフォンにおける副次的な意味について
３．学会等名 第44回関西言語学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川原功司
２．発表標題 軽動詞構文とイデオフォンの統辞構造分析
３．学会等名 第44回関西言語学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kawahara, Koji
２．発表標題 A Syntax of Japanese Predicative Ideophones
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics 27（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koji Kawahara
２．発表標題 Subjective Ideophones and Their Core Meanings
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics 26（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuko Yoshimura and Koji Kawahara
２．発表標題 Turn-taking in Children with Autism Spectrum Disorder
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics 26（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 川原 功司	４．発行年 2023年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 248
３．書名 英文法の教え方ー英語教育と理論言語学の橋渡しー	

1．著者名 Rodney Huddleston、Geoffrey K. Pullum、畠山 雄二、藤田 耕司、長谷川 信子、竹沢 幸一、今仁 生美、伊藤 たかね、由本 陽子、澤田 治、川原 功司	4．発行年 2021年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 384
3．書名 「英文法大事典」シリーズ 第10巻　形態論と語形成	

1．著者名 田地野彰，金丸敏幸，川原功司，ほか	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 328
3．書名 明日の授業に活かす「意味順」英語指導ー理論的背景と授業実践	

1．著者名 川原 功司	4．発行年 2020年
2．出版社 名古屋外国語大学出版会	5．総ページ数 308
3．書名 言語の構造　人間の言葉と動物のコトバ	

1．著者名 川原功司	4．発行年 2019年
2．出版社 名古屋外国語大学出版会	5．総ページ数 240
3．書名 英語の諸相 --音声・歴史・現状--	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関